

自動翻訳普及 交流アシスト

W杯を遠隔応援

大阪・韓国の小学生

インターネットと高速通信網の普及で、外国語を自動的に翻訳するシステムの利用が広がっている。これまでは英語が中心だったが、サッカーW杯の共同開催やアジアとのビジネスの拡大で韓国語や中国語の需要も高まっている。大阪府内の小学校ではW杯にあわせて韓国の小学校との間を通信回線で結び、自動翻訳を使った合同応援が実現するなど、国境を越えた新たな交流も後押ししている。



自動翻訳システムを使い、W杯の韓国—米国戦を韓国の子供たちと一緒に応援する道明寺南小の児童—大阪府藤井寺市で

「韓国が逆転勝利だ」。
メッセージを送った大阪府藤井寺市立道明寺南小6年の馬場美沙さん(11)に、韓国の翰林初等学校の生徒から「感謝します。日本の学生もみんな我が国を応援してください」と返事がすぐに来た。約600名離れた両校が10日、W杯の韓国戦を合同で応援した。テレビ会議と自動翻訳システムで教室を結んで実現した。

馬場さんがパソコンで入力した日本語は、校内の無線LANと10メガの光ファイバーから翻訳用のサーバーを介し、即座に韓国に届いた。中にはおかしな訳語もあるが大意はわかる水準に達している。馬場さんは「言葉が通じて意気投合し、韓国が身近に感じられた」と話す。

日韓の翻訳ソフト大手の高電社(大阪市)は携帯電話のメール機能を使ったサービスを昨年9月に始めた。携帯電話で日本語を入力して送信すると、韓国語に翻訳されて自分の電話に返ってくる。音声データも受信するため、韓国語での発音も聞ける。アクセス数は200万件を突破した。同社は携帯情報端末にソフトを組み込んだ自動翻訳機の開発を進めており、旅行会社と連携して

海外旅行者に貸し出すビジネスも計画している。在日韓国人の高基秀社長は「W杯で日韓の交流が深まり、自動翻訳の需要も急速に増えている」と話す。

自動翻訳ソフトを標準装備するパソコンも東芝、富士通、シャープなどから発売されている。シャープのパソコン「メビウス」は、自社製の英日自動翻訳ソフトを標準装備している。ホームページのレイアウトそのままに日本語をつけたら、翻訳語のデータを携帯電話に移し独自の単語帳をつくれる。

ソフトメーカーや研究者らでつくるアジア太平洋機械翻訳協会によると、98年度に約265万本だった自動翻訳ソフトの出荷本数は、01年度には526万本に達する見込みだ。同協会は「今後の需要拡大には、翻訳精度の向上が大きな課題だ」としている。